

連載

# 誇り・味方・居場所 —私の社会保障論

日本を代表する医療・福祉ジャーナリストが、日本のみならず世界の医療・福祉の最前線取材し執筆した記事は、人権や改革に背を向けてきた旧い日本の医療・福祉のあり方を変えてきました。

「寝たきり老人のいる国いない国」などの見事な変革のためのメッセージは広く知られています。

この連載は、小社から刊行している著者の著作『誇り・味方・居場所—私の社会保障論』(2016年刊)から、コロナ禍の現在に欠かせない視点を示唆する論説を選択・紹介するものです。



## 大熊由紀子

ジャーナリスト、国際医療福祉大学大学院教授  
元朝日新聞論説委員

おおくま ゆきこ

東京生まれ。東京大学教養学科科学史・科学哲学分科卒業後、朝日新聞社入社。社会部、科学部記者・次長を経て、同社女性初の論説委員に。科学、技術、医療、福祉を担当。退社後、大阪大学大学院教授、厚生省介護対策検討会委員、医療審議会委員などをへて現職。現在、ホームページ「ゆきえにしネット」<http://www.yuki-enishi.com/>、個人メール「えにしメール」(18ヶ国6,000通発信)、年1回開催「縁を結ぶ会」など大きなネットワークで情報の発信・共有を行っている。

## 第14回

# だれにも降りかかる「介護被災」

東日本大震災の被災者支援に奔走中の小山剛さんは、避難所風景をスクリーンに映し出して言いました。

「ここで暮らしている方たちにはプライバシーがありません。見知らぬ人と共同生活しなければなりません。最大の関心事は、いつ、帰れるか、です」



東日本大震災時の避難所



〈福祉と医療・現場と政策の「新たなえにし」を結ぶ会〉でプレゼン中の小山剛さん。

そして次の言葉で、この運命が日本に住む誰にでも起こりうるということを強く印象づけてくれました。

「夜、ヘルパーさんがいない、包括的なケアのない街に住む皆さんも介護被災という災害の被害者です。生活保護よりはるかに水準の低い住環境の特養や病院に集められます。自然災害と

違うのは帰れる見込みがないことです」

2011年4月に開かれた〈福祉と医療・現場と政策の「新たなえにし」を結ぶ会〉のシンポジウムでのことでした。



〈福祉と医療・現場と政策の「新たなえにし」を結ぶ会〉の会場風景

小山さんは、新潟県長岡市にある高齢者総合ケアセンターこぶし園の総合施設長。嘆き、批判するだけでなく、“避難所ケア”から脱出する筋道を作り上げました。

内閣府に特区申請し、園長をつとめる山の上の特養ホームを5つに分散する計画に着手しました。入居している人たちを元々住んでいた地域に戻す計画です。

長岡市を訪ねてみました。まちのなかに「小さな特養」があると想像していた私のイメージは、心地よく裏切られました。例えば、ケアの複合拠点「摂田屋」。ごくふつうの家のたたずまいで、通りすぎてしまうところでした。



小規模特養「摂田屋」は、元自動車教習所。それぞれの部屋に玄関があって家族が気兼ねなく訪ねます。



居酒屋風のバーカウンターやキッズコーナーが設けられ、「まちの茶の間」といった風情です

親しい人がいつでも訪ねられるようにそれぞれの部屋に玄関がありました。バーカウンターやキッズコーナーが設けられ、「まちの茶の間」といった風情です。七夕飾り

をお年寄りと一緒に作るため子どもたちが集まってきました。

山の上の特養を訪ねました。半分以上の入居者が街に戻り、雑居部屋だった施設は空き室だらけ。救援物資の置き場になっていました。



子どもたちが七夕飾りに続々と

話は、1989年に遡ります。私は、デンマークの高齢者福祉を世界一にした元社会大臣のアンデルセン教授を招いて、当時の厚相に引き合わせました。

助言は3つありました。きめ細かく個人にあわせて地域で包み込む「包括ケア」、入院中から始める「継続的なサポート」、そして、施設を「家」に。「すると、老人は社会の一員として輝き、社会全体の費用は少なくなります。デンマークの経験です」と教授は話しました。



夢を語ることは誰でもできます。

けれど、夢をかたちにできる人はめったにいません。

官僚や政治家を説得して、思想を、制度にしてしまう人はさらにまれです。そのために、小山さんは、一度聞いたら忘れられない、心に突き刺さる表現を次々と編み出しました。

「精神病院や特養に拉致される」「介護つき住宅から、介護

つき地域社会へ」「在宅ケアも、回転寿司のような出来高払いから、飲み放題食べ放題の施設同様の定額払いに」「特別養護老人ホーム解体」。

冒頭の避難所のたとえも、その1つでした。

2014年、山の上の特養はすべて解体されて、お年寄りは、思い出のまちに戻りました。そこは、地域包括ケアの拠点になりました。1980年代には夢物語に思えた3つの助言が、長岡で現実のものになったのでした。しかも、海外の人を感動させる日本独特の文化をまとって。

特養ホームの建物は看護大学になりました。

その小山さんを病魔が襲いました。

あまりの痩せようと顔色にまわりの人が心配し、しぶしぶ病院へ。その場で余命1~2カ月と知らされました。病名は膵臓がん、それも、あちこちの臓器に転移して末期症状。この日、2015年2月17日は剛さんの誕生日でした。

右頁は、その4日後、2月21日発でいただいたメールの抜粋です。

\*————\*★\*————\*

お聞きおよびのとおり、まさか~の状態になっております。

不摂生とか働き過ぎとか言われるのですが、これは、見つかった時に手遅れがわかるという予測不能な疾病らしいです。

幸いにも性格が後ろを向かないタイプですからなんとかなっています。

小規模の創設、楽しかったですね~、毎日がドキドキワクワクの楽しいチャレンジの連続でしたし、本当に素晴らしい仲間たちとの出会いに感謝・感謝です。「みんなでいい事を言いながら赤字に苦しむ会」なんて、そうそうありませんよ。でも、つよがりやせ我慢のおかげで、こんなに広がりましたし、これからも、地域包括ケアの中心になる素晴らしい事業だと思います。

私はもう活動できませんが、その分皆さんが活躍していただけるものと期待しています。みなさんの優しい気持ちを大切に、その日が来るまで前向きに生きていきます。

素晴らしい仲間たちの事は忘れません。本当にありがとうございました。

\*————\*★\*————\*

「その日」は3月13日に訪れました。午後2時47分、自宅での旅立ち。まだ、60歳でした。

最後に小山剛さんの笑顔を(^\_-)-☆ 福祉と医療・現場と政策の「新たなえにし」を結ぶ会恒例の「えにし結びたい・む」での小山さんです。 (一部を除き撮影は神保康子さん)



### 特養ホームの居室面積

1963年に制度ができた際の基準は1人当たり4.95㎡の8人部屋。77年に1人8.25㎡の4人部屋に。2003年に全室個室13.2㎡の新型特養が打ち出されたが、民主党政権の地域主権政策によって雑居に後戻りする自治体が出てきた。デンマークでは、トイレ・シャワーのある65㎡が標準だ。

編集部註：本連載は、小社から刊行している『誇り・味方・居場所—私の社会保障論』(2016年3月10日発行)から選択して掲載しております。初出は毎日新聞朝刊に月1回掲載された「私の社会保障論」(2011年5月～2013年9月)です。したがって、記事中の人物・名称・活動・事物などで現在は亡くなっている方や変化している場合もありますのでご了解のほどお願い致します。



『誇り・味方・居場所—私の社会保障論』  
大熊由紀子著  
B6判変型 定価 1,600円+税

\*単行本

<http://lifesupport-co.com/order33/books.html>

\*電子版

<http://www.shinanobook.com/genre/book/3443>